

Ⅱ. 主要電設資材

1. 電線・ケーブルの需要動向

(一社)日本電線工業会の調査による令和元年度(2019)の銅電線出荷銅量は、内需67.8万トン(対前年度比0.2%増)、輸出1.7万トン(対前年度比23.6%減)、内外需合計69.4万トン(対前年度比0.5%減)となった。内需の需要部門別では、電気機械、その他内需で対前年度比減となったが、通信、電力、自動車、建設・電販部門で対前年度比増となり、3年連続で前年度実績を上回った。内外需合計では、平成26年度(2014)以来の5年ぶりの70万トン超えが期待されていたが、主力の建設・電販部門では、上期を中心に東京オリンピック・パラリンピック関連等の需要があり、当初予測並みの34万トンを超えたものの、前年まで大型の海外電力網整備プロジェクト向けの出荷があったことから、3年ぶりに輸出部門の大きな落ち込みもあり、全体需要を牽引することができなかった。また、(一社)日本電線工業会による令和2年度(2020)の銅電線出荷量の需要予測は、全世界的に蔓延している新型コロナウイルス感染拡大による影響の本格化に伴い、需要見通しの予測が極めて困難であることから、現段階での発表は行わないことと

なった。

次に、令和元年度(2019)のLME銅相場を四半期ごとにまとめると、第1四半期は、序盤6,300~6,500ドル台で比較的安定して推移したが、5月に入り、FRBが当面の金利据え置きを発表すると、ファンダメントの売りにより下落した。米中貿易摩擦への懸念も加わりリスク回避から、6,000ドルを割り込んだ。その後も、G20を控えての様子見から、6月末は5,900ドル台となった。第2四半期も引き続き弱含みの展開となった。米国の対中国追加関税報道に始まり、中国の需要不安、元安・ユーロ安等により、銅価は下落傾向が続いた。世界的な経済不安を背景に、金などの安全資産に資金が流れる傾向で、9月末には5,700ドル台まで下落した。第3四半期は、10月にチリの首都サンティアゴの地下鉄運賃値上げをきっかけにした反政府デモが、全国的な暴動に発展。鉱山スト、港湾ストなどに波及し、徐々に精鉱需給のタイト感が強まり、銅価は底堅い展開となった。12月には米中貿易摩擦が部分的合意に至り6,000ドルを超え、令和元年(2019)12月末のLME銅相場は、6,156ドルまで回復した。しかし、第4四半期は、1月に新型コロナウイルスの報道が拡大していく中で、再び6,000を割り込んだ。2月には、韓国、イタリアで感染者が増加し、

第4表 令和元年度(2019)部門別電線需要見通し

(単位: 1,000トン, %)

部 門 \ 年 度	平成 26年度 (実績)	平成 27年度 (実績)	平成 28年度 (実績)	平成 29年度 (実績)	平成 30年度 (実績)	令和 元年度 (実績)	対前年度比 30/元	令和 2 年度 (2020)			対前年度比 元 / 2
								上期 (見通し)	下期 (見通し)	通期 (見通し)	
通 信	12.5	11.3	11.1	10.3	10.1	10.5	(%) 4.0	未公表 令和 2 年度(2020) は、新型コロナウイルス感染拡大による影響の本格化に伴い、需要見通しの予測が極めて困難であることから、現段階での発表は行わないこととなった。			
電 力	56.3	59.6	54.6	50.1	48.9	49.8	1.8				
電 気 機 械	160.1	149.7	149.5	149.2	145.0	134.9	▲ 7.0				
自 動 車	72.2	70.2	74.5	82.2	85.3	90.4	6.0				
建設・電販	340.1	338.1	320.9	321.7	335.1	342.2	2.1				
その他内需	51.3	48.5	52.7	52.7	51.4	49.6	▲ 3.5				
内 需 計	692.4	677.3	663.4	666.2	675.8	677.5	0.3				
輸 出	31.2	21.9	16.8	20.7	22.0	16.8	▲ 23.6				
合 計	723.5	699.2	680.2	686.9	697.8	694.2	▲ 0.5				

注) 四捨五入のため、計と合わない場合もある。

((一社)日本電線工業会調べ)